

日本聖公会 全国青年ネットワークニュース

第33号

2009年11月25日発行



日本聖公会宣教150周年記念プログラム開催

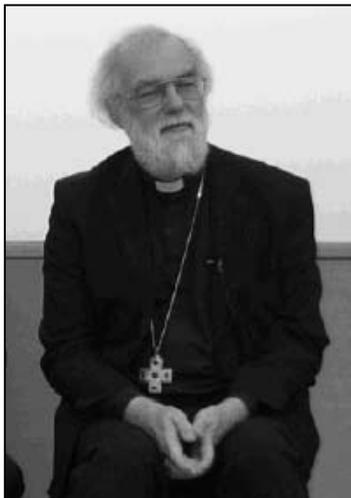
9月22日、「全国青年大会リ・ユニオン」も兼ね、全国から多数の青年が一堂に会し、「カンタベリー大主教と青年の対話」や「青年活動のアピールタイム」、「交流会」などのイベントに参加しました。



青年活動アピールタイム



交流会にて沖縄の唄を合唱

青年委員会作成
150周年記念クリアホルダーを販売

カンタベリー大主教と青年の対話

このプログラムは、「日本の青年たちと語り合いたい」という大主教ご自身の希望もあって実現しました。

青年活動に強い関心を寄せている大主教は、会場の青年たちから積極的に投げかけられる質問に対し、ときにユーモアを交えながら、一つ一つ丁寧に質問者の目を見ながら答えていらっしゃいました。なかでも平和に関する日本の青年たちの取り組みについては特に強い関心をもたれ、これからも続く大切な課題として、日本の青年たちへの大きな期待を語っていらっしゃいました。

リラックスした雰囲気の中で青年たちと語り合いたいとの大主教の希望通り、和やかな空気に包まれ、青年たちがそれぞれの思いを語った、素敵なひとときでした。

(青年委員会委員 坂根久仁子)

第4回 日韓聖公会青年セミナー 2009 ～葛藤を越えて、平和の世界へ～

8月13日(木)～18日(火) 華川(ファチョン)およびソウルにて、第4回日韓聖公会青年セミナーが開催されました。韓国側からは、参加者15名+スタッフ5名、日本側からは参加者13名+スタッフ7名の合計40名が参加。

平和の鐘(右写真)を展示したベルパークやDMZ(非武装地帯=朝鮮民主主義人民共和国との国境付近)を訪れました。また、講師を招いた「平和学習」や、深夜になるまで続けられた意見の分かち合いなどは、平和の実現への課題と重要性を知る貴重な機会となりました。

韓国側は数年前から継続的に参加している青年が多かったのに対し、日本側の参加者は、ほとんどが今年初参加。言葉や文化の違いにもとまどいました。そのような状況のなか意見がすれ違うことも少なくありませんでしたが、「東北アジアの平和の実現」という目的のもと、共に歩みを進めていく、その大きな第一歩となる出会いを経験することができたセミナーでした。

(青年ネットワーク事務局 山田拓路)



沖縄・辺野古に関する青年の声

アメリカ聖公会総裁主教の元へ

◆中部教区を訪問

9/25(金)、ドー主教(英国聖公会主教)、ダグラス・フェントン司祭(米国聖公会/Young Adults & Campus Ministries)、ピーター・ナンさん(米国聖公会/Program Officer for Asia Pacific)、クリス・ハンビーさん(米国聖公会の青年で、名古屋学生青年センターにて実習中)の4名が中部教区を訪問されました。その際、「日本の青年たちと語り合いたい」との要望から、愛知聖ルカセンターにて、中部教区の青年3名と対談を行いました。

対談では、はじめに日本の青年から、全国青年大会、日韓青年セミナー、九州教区平和を考えるプログラム、辺野古での活動などについて紹介がありました。

◆沖縄・辺野古のこと

米国聖公会総裁主教ジェファーツ・ショーリ師は、9月22日に立教大学で行われた宣教150周年記念のフォーラムで沖縄教区主教谷昌二師の講演を聞き、初めて、沖縄の地の多くが米軍基地に占領されていること、また現在沖縄が普天間基地移転建設問題に揺れ、辺野古の海が危機に瀕していることについて知りました。ショーリ主教は、海洋生物学者でもあるため、特にこのことに大きな関心を示したそうです。

日本の青年が、昨年の青年大会をはじめ辺野古での問題に取り組んでいることをお聞きになったダグラス司祭が、この問題に関しての日本の青年の意見や思いをショーリ主教へ届けてみないかとの提案をして下さいました。ショーリ主教にお見せしたうえで、近々行われる予定の会議において、この日本の青年からの声をご紹介いただけるとのことでした。

急遽、昨年の全国青年大会参加者のうち数人に連絡をとり、沖縄・辺野古に関する思いを短く文章にして送ってもらいました。それをクリス・ハンビーさんと中部教区の青年が協力して翻訳し、ダグラス司祭にお送りしました。

以下、その中から3名の方のメッセージを掲載します。



辺野古で学んできたこと

私たちが辺野古で学んできたことは、何よりもまず、地元のおじい、おばあへの平和への熱い思い、その精神でした。それは、沖縄の言葉「命どう宝(ぬちどうたから=命こそ宝の意味)」を表す姿です。

沖縄では、かつての沖縄戦により、じつに23万を越える人々の命が失われ、当時の県民の4人に1人が亡くなったと言われています。つまり、誰もが愛する家族や友人を失う辛く悲しい経験をしました。その悲しみと痛みを経験から、二度と戦争を起こすまいと堅く決意したのが沖縄の人々です。

しかしながらその沖縄で、その後何が起こりまた現在何が起きているか。島には今も巨大な米軍基地が多数存在し、兵士による暴力事件は頻発。また基地に隣接する地域では、戦闘機の離発着訓練等により住民の健康被害は続出。ついには障害を来す人も多くいます。嘉手納基地横の砂辺(すなべ)地区では、繰り返される爆音の影響により乳児が突然頭を壁に打ち付けるなど異常行動を起こしたケースもあります。戦後このような基地被害は後を絶ちません。

米国土土では到底許されないであろう人権侵害の数々が、なぜか沖縄ではまかり通るという異常事態の中での生活を、

沖縄の人々は余儀なくされています。また、沖縄の米軍基地から世界各地の戦地へ向けて戦闘機や輸送機、多くの兵士たちが発進しているというやりきれない現実があります。

さらに辺野古には、今新たな基地が建設されようとしています。このまま計画が進めば、おじい、おばあたちが大切に、宝として次世代へと引き継いで行くことを願っている美しい海、また豊かな自然は壊され、これまでの基地被害はさらに拡大され、砂辺地区と同様になるのは明らかです。

たくさんの尊い命を失い悲しみに暮れる人々が、二度と戦争を起こしてはならない、加担してはならない、という気持ちを抱くのは、人としてあたりまえのことではないでしょうか。

「命どう宝」を実践する辺野古の人々は、「隣人を自分のように愛しなさい」との命令を受けているキリスト者の生き方と重なると思います。この動きに大きく関わる米国、日本にある聖公会が力を合わせて、辺野古で平和を訴える人々ともつながって基地廃絶のための取り組みを力強く行いたいと思います。

管区正義と平和委員会委員
九州教区・小倉インマヌエル教会
司祭 マルコ柴本 孝夫

私は、管区のプログラムをきっかけに、辺野古への新基地建設に反対する活動に参加し、現在その場所に暮らしています。

この辺野古の海と、隣接する大浦湾とは、非常に珍しい生態系が残り、生命にあふれた珊瑚礁の海です。

私たちは、シュノーケリングで貝をとったり、カヤックを漕いで海ガメに出会ったりします。

静かな早朝の海で、ジュゴンに会えるかもしれないと、期待をしたりします。

浜で貝殻をひろい、朝日や満月を眺めたりします。

私たちにとって、この海は生活の場所であり、神さまの与えてくださった豊かさというものに、感謝する場所なのです。

この場所で私たちは、神さまの与えてくださった大きな自然の恵みに対して、謙虚な気持ちにならずにはられません。

この海は同時に、あの戦争の苦しみを生き抜いたお年寄りたちにとっては、命を救ってくれた海です。

この辺野古を戦争のための基地にしてはならない、と立ち上がったのは、戦後、海の恵みだけを頼りに生き延びたお年寄りでした。

私たちは、彼らが「この海を、子や孫に残したい」と立ち上がってくれたことに感謝し、応え、彼らを中心に活動を続けてきました。

戦後64年、島中に基地を受け入れ、沖縄は平和になったのでしょうか？

先祖伝来の土地を奪われ、経済的には全国から圧倒的に遅れをとり、自然は破壊され、軍人による事件・事故——騒音、流弾、墜落、山火事、水質・土壌汚染、交通事故、暴力、レイプ、強盗——は「日常」となっています。

沖縄に住む人々は、あきらめつつ、うんざりしているのです。

私たち若者たちは、もう基地に期待などできません。

私たちが求めるのは、静かな土地で子どもを育てること。

豊かな自然を資源として、生活をたてること。

おじいやおばあが苦しんで来たように、戦争の手伝いをしないこと。

私たちの思いを、この海的美しさを、どうぞアメリカの人々に広く伝えてください。

アメリカでは許されないことが、なぜこの島では行われるのですか？

私たちがここで出来ることはすべてやっています。

だから、どうぞあなたの中で、一緒に出来ることをしてくださいませんか？

沖縄教区・名護聖ヨハネ教会信徒 神崎直子

○基地について

「基地は人を殺すための訓練をしている＝人を兵器にする場所。特に海兵隊は最前線で戦うために、目に映った瞬間に反射的に殺すための訓練も行っている。それによって兵隊たちの心は壊れ、沖縄で様々な事件を起こしてきた。」と聞いた。心を壊してまで、また人を傷つけることが容易くなるようにしてまで人を人ではなく兵器に近づける、そんな施設は(沖縄にだけでなく)いらないと思う。

○辺野古について

地獄のような沖縄戦を経験し、たくさんの辛い痛みや悲しみを背負いながら生きてきたおじいやおばあが「子や孫には同じ思いはさせたくない。基地があるから戦争が起こる。」と基地反対の座り込みを始めた。子や孫であり、また子を生んでいく私たちがその思いを理解し、応えないといけなと思う。

海は人が生きるために様々なものを与えてくれる。戦後生きてきた人たちの命をつないだ海はおじいやおばあのものであり、また子や孫である私たちのもの、そこに生きる全ての生き物のもの。その平和な営みは神の創造によって造られたものであり、人の手で壊してしまうと二度と取り戻すことはできない。まして、国の戦略の

ために戦争をするための場所にしてしまうなんて、おじいやおばあに心だけでなく人生そのものを裏切ることになり、神の業をも裏切ると私は思う。

沖縄に基地があるということは、おじいやおばあにまた戦争を思い出させることになる。もういらない、おじいやおばあを戦争から解放してあげたい、と私は思う。

○望むこと、伝えたいこと

- 沖縄に辺野古にジュゴンの見える丘に行って見てほしい。おじいやおばあに会ってほしい。
- 戦争にNOと言わない人に戦争は何をしているのか、空襲や原爆の下、沖縄の地で人がどうなったのか知って欲しい。
- 戦争や基地が存在し、無くせない、理想なんて無駄だという世の中で、イエスを尊敬する私達キリスト信者が「争いはいらぬ。戦争・軍隊・基地はいらぬ」と理想を語らずして誰が語るのだろうか、と私は思う。理想は、思い、学び、語り、伝え、祈り続ければいつか叶うと信じる…信じたい。その理想を私たちが保ち続けることができるよう、神によって強められるように祈ってほしい。

京都教区・京都聖マリア教会信徒 谷景子

ヒロシマーナガサキ平和の旅

by チャリ

九州教区・福岡聖パウロ教会信徒

武田宗久



途中立ち寄った福岡聖パウロ教会にて

みなさん初めまして！私は福岡聖パウロ教会の武田宗久と申します。

私達は今年の8月5日～10日にかけて、「ヒロシマーナガサキ平和の旅 by チャリ」（平チャリ）と題し広島から長崎まで、約420kmを自転車（ロードバイク、クロスバイク）で走るという旅をしました。

私は、現在大学2年生。ようやく新しい生活にも慣れ、勉強やバイトなどで忙しい日々を送る、そんな普通の大学生でした。しかし、なにか物足りない、刺激が足りない…。そんな満足できない一日一日でした。

ちょうどそんな時、この話が飛び込んできました。元々本格的な自転車に乗っていた、というわけではなく、学校の通学にママチャリに乗っていた程度で、部活などもそれぞれやっていたのですが、自転車向きの筋肉なんかはもちろん付いておらず、そんな貧弱な体で420kmも走るなんて…。最初は私もさすがに無理と思いました。しかしこの旅が私の満たされない心を癒してくれるのでは？と感じ、この旅を企画するに至りました。

この旅の目的は、ただ広島から長崎まで自転車で走るだけではなく、様々な人から平和についてのメッセージを集め、そのメッセージがより多くの人達に伝わるように、それを携え原爆が投下された地である広島と長崎をつなぐことでした。



道中で出会った人から集めた平和のメッセージ

また、広島から長崎までをみんなと力を合わせ、楽しく走ることも旅の目的の一つです。一緒に走った仲間との絆は、強く印象に残りました。参加者は九州内から10名ほど集まりました。速いペースについていけなくなった参加者がいると、先を行っていた仲間が後ろを振り返り、少しペースを落として、「大丈夫？」の一言。途中大雨に遭遇した時も、限られた時間の中で懸命に自転車をこぎ、みんなで励まし合いながら進んでいきました。その日のノルマをクリアすると、マッサージをしたり、美味しい晩御飯をみんなで食べたり、みんなで同じ屋根の下で寝て、次の日は朝5時起きで出発！！終盤ごろになると、そこにはもう一つのチームが出来上がっていました。中にはどうしてもみんなと走りたくて、予定をすっぽかしてまで走っていた人もいたとか……。

みなさんどうですか？少し「面白そう…」って思いましたか？みなさんの中にもなんか物足りない…。なにか凄いことをやってみたい！という人がきつーと思います。みなさんもぜひ面白い事、自分がやってみたかった事を実行してみてください！こんな普通の私にもこんなすごい経験をする事ができたのです。きつー素晴らしいものを手に入れることができると思います。

「沖縄の旅 - 忘れないために出会いに行こう」

北海道教区・札幌聖ミカエル教会信徒

ヨハネ 出町勇人

政権交代からもう数カ月がたとうとしている。あの夏、あの浜に集った私たちには、これで辺野古への基地移転が白紙に戻るはず、という高揚した気持ちが芽生えていた。しかし、今度こそという思いは、アメリカからの外圧や利権の声に屈して、今また裏切られることになるかもしれない。座り込みの人々の無念さが目に浮かんでくる。期待させておきながらどうして？と叫びたくなる。でも沖縄の人々はみな、こんな理不尽なめに、ずっとずっと、ずーっと遭ってきているに違いないのだ。

沖縄は楽しいばかりのところじゃない！ 全国青年大会と今回の沖縄の旅の2度の訪問で実感した。基地の騒音で生活が脅かされ、美しい海が埋め立てられて命の糧を奪われる。前が晴れない過去と現在の暗闇を目の当たりにしたからだ。でも、それから目をそむけないで出会いに行くことが、沖縄の旅の意味だと思う。だから、沖縄の地で、みんなで気持ちを一つにして祈ろう。そして、主イエスが示された光を求め歩いて行こう。

「わたしは世の光である。私に従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」

第2回「多民族・多文化共生キリスト者青年」現場研修プログラム

大阪教区・聖贖主教会信徒
眞子義人

2009年7月28日～8月4日、外登法問題と取り組む全国キリスト教連絡協議会（外キ協）の主催で行われました。
朝鮮半島より強制的に日本に連れてこられた方々に思いを馳せながら、北九州の現場研修から始まり、下関からフェリーに乗って、釜山、堤岩里（チェアムリ）、ソウルの歴史現場、教会現場を訪問しました。

この青年の旅は、

- ①現場を通じた課題の学習（近現代史、基督教・市民運動、日・韓における外国人が置かれている状況などを学ぶ）
- ②外キ協リーダーの養成（外キ協の運動と青年世代をつなぐ）
- ③将来に向けてのエキュメニカル・ネットワークの形成（日韓の青年間の交流促進）

以上の目的をかかげて日・韓・在日教会の共同プログラムとして5年計画で始めたもので、2年目の今回は、各教派団体から合計10名が参加。ともに日韓両国の歴史現場をめぐり、また移住労働者たちとの共生の実践をみつめ、またそれらに学ぶ時間をともにしました。

・ナヌムの家を訪れて

「ナヌム」とは韓国・朝鮮の言葉で「分かち合い」という意味だそうです。ここは、日本軍「慰安婦」被害女性たちの居住福祉施設で、被害を受けたハルモニ（おばあさんの意）たちの生活の場と、歴史館がありました。

到着してすぐに、映像資料「私たちは忘れない～追悼 姜徳景ハルモニ」を見て、歴史館ではボランティアの方から「日本軍『慰安婦』とは何か?」、「従軍慰安婦」という言葉の問題、慰安所における性暴力の実態、ハルモニたちの絵画、国民基金の問題点等についての説明を受けました。

歴史館を出た後、ハルモニたちと面会する機会がありました。「日本の学校で日本軍慰安婦問題を教えようと思わないことについてどう思いますか?」という質問に対し、「悪いのは教育ではない。責任があるのは皆さんではなく、政府である」「日本政府はなぜ隠そうとするの? 隠し通せることではないのにね」「教科書に書かなければならないね」といった言葉をいただきました。特にあるハルモニは、中国で置き去りにされ、北朝鮮に渡るが南に帰れず、再び中国に戻り、さらに韓国へ向かうという戦後の苦しい体験を語って下さいました。

ハルモニたちと一緒に写真を撮った後、去り際に1人のハルモニが私の手を握ってきました。何か言い切れないようなメッセージを受け取ったような気がします。

・全体の感想

私にとってこの旅がどういうものだったのかと聞かれると、「きっかけ」というほかにありません。日韓の歴史や移住労働者たちとの共生の現場を巡り、見て、聞いて、触れた全てのことを理解することなんてできませんが、この旅を通して感じたことは、過去の歴史と向き合い、自分たちがこれから創っていく歴史に責任を持たないといけないということです。

そのために自分に何ができるのかを考え、動き続けていきたいです。



ナヌムの家 - 日本軍「慰安婦」被害女性たちの歴史館

2009エイティーズ特別企画 ～沖縄慰霊・祈りの旅～

九州教区・久留米聖公会信徒
小川麻衣

昨年夏の全国青年大会をきっかけに発足したエイティーズ。聖書と黙想のために、全国各地から青年有志が集うこの集まりも、4回目を迎えました。第1回、第2回は東京にて黙想会と聖書の学びを深め、今年8月の第3回は、エイティーズ発足の地、沖縄にて慰霊と祈りの旅を行いました。今回はこの旅のご報告です。沖縄で戦争と平和について学ぶ、というだけでなく、祈りを中心においた旅にしたいというメンバーの熱い思いから実現したこの旅。講師にはカトリック・イエズス会の具正謨（クー チョンモ）司祭をお迎えして、全10名の参加となりました。

学び・祈りともに盛りだくさんの4泊5日。南部戦跡めぐりでは沖縄戦を体験された石原司祭のお話を伺い、恵みを感じる体験を！と、神の島といわれる久高島へも行きました。驚くほどきれいな浜で黙想をし、空のいろ、海のいろ、風、すべてがただただ与えられているのを感じることができました。



2日目に宿泊した会沢芽美さんのペンションにて

辺野古での重々しい鉄条網のすぐ隣での祈り、チビチリガマでの祈り、愛楽園での生まれることのない命のための祈り…祈りの中で共に過ごすことで、日々感じる神の恵みについて自然と語ることができました。具司祭の毎晩の講話をもとに黙想をし、参加者それぞれにとって必要な導きを与えられているな、と深く感じました。

自分たちが心の底から祈りを欲し、それを自然と分かち合える仲間が与えられていることに感謝が溢れる旅となりました。

京都教区

京都教区では、青年の集いを実施しました。

10月23日(金)19:00～は、今年夏にテゼ共同体に参加した、奥執事、藤井和人さん、小林聡司祭の報告会。今年はいこれまで青年の集いを5回開き、テゼの祈りをし、聖公会について学んできました。世界の赦しと和解のうねりに京都教区青年も大いにつながりたいと思います。

11月13日(金)19:00～は、この夏の日韓青年セミナーを中心に報告会。浮田倫太郎さん、佐藤由佳さんが、①ダイジェスト報告(スライドショー)、イ)DMZ/平和ダム etc ツアー、ロ)セッションI、II(平和学)、②セッションI、II:平和学の紹介～葛藤の解消におむけて～(身近な例などで、参加型ワークショップ)、③韓国での実践～日韓青年の葛藤～、④まとめ～平和学がなせるものこれから、何をするか～、などの報告がありました。今後も「ぼこぼこ」と集まり、祈りと学びと行動を続けていきます。(大津聖マリア教会 司祭 小林聡)

第7回成年会の報告

【成年会世話人 下条美香(京都) 当舎あずさ(大阪) 塚田直文(神戸)】

京都・大阪・神戸教区のうち、近畿圏に住む日本聖公会信徒の元青年メンバーを中心に2006年から活動を始めた成年会ですが、去る7月25日(土)に第7回目の集いが(警報が出るほどの大雨の中)神戸聖ミカエル教会垂水伝道所を会場に行われました。

これまでの集いは基本的に、講演や講話、またはワークショップなどを必ずプログラムに入れてきましたが、今回はとにかく時間を気にせず「思い切りべちゃくちゃ喋ろう」ということをテーマにプログラムを組みました。その中で懐かしいメンバーとの再会や初めての方との新しい出会い・交わりを通して、これからもこの活動を継続してやっていこうというヴィジョンが与えられたように思います。

これまでは基本的には3教区合同の形でやって参りましたが、次回はさらなる新メンバー獲得をめざし、各教区独自でプログラムを企画する予定です(来夏は夏に宿泊キャンプも?)。各教区で詳細が決定しましたら、担当者からアナウンスがあると思いますので、興味のある方はどうぞご参加下さい。(神戸教区・神戸聖ヨハネ教会信徒 塚田直文)

リレートーク 平和のかたち ②

ヨイエスは平和について私たちに示されましたが、現実の社会でそれはさまざまな姿をとります。一人ひとりの持つ多様な豊かな平和のイメージをかち合うことで、それが共に平和を表現するための土壌になればと思います。今回は、前号筆談の松原さんからの紹介で、神戸教区の井田さんに書いていただきました。

神戸教区・米子聖ニコラス教会信徒 井田桃子

今回このお話を頂いたとき、日頃真面目に平和について思い、また考えていない私にとって、とても難しいものを感じた。そもそも平和にかたちなんてあるの?とってしまう。

そんな私が「平和」を見たような気がした体験が1度だけある。それは、2年前に韓国に行った時のことだった。ソウル市内で空港へのバスを待っている時、道の反対側にあった大きな建物の壁一面を使って描かれた、ハイビスカスが目に

留まった。韓国人の方にそれが何か聞くと、「今日は韓国が日本から解放された日だから、お祝いのためだよ」と返ってきた。その日は8月15日だった。勿論そういう歴史があることも知っているが、それまでの自分の日本目線での終戦日とは違って、日本で終戦何年目というニュースを見るよりも、はるかに心に刺さった。

その後私の心の中に浮かんだのは、国同士だろうが、国内だろうが、社会だろうが、友達だろうが、家族だろうが、

平和を諦めないこと。そして、平和の形がわからなくても、そうなるための具体的な行動がわからなくても、私は、「平和がありますように」とこれからも願い続けるだろう。



★開催が予定されているプログラムの詳細及び最新情報は、青年ネットブログ (<http://youthnssk.exblog.jp/>) をご覧下さい。

★「全国青年ネットワークメンバーリストへの登録は、全国青年ネット HP から。(<http://www.nskk.org/province/youth/>) 「おきなわ・へのこのご通信」が毎月投稿されています。

新・日本聖公会青年プログラム参加助成制度をご利用下さい!

◆青年プログラム参加助成制度とは・・・

この助成制度は、日本聖公会の青年たちが、様々な研修・プログラムに参加し、その経験を日本聖公会、とりわけ青年活動に生かすことを目的とし、参加に係る費用を補助するものです。日本聖公会青年委員会が運営し、各教区に設置された「青年担当者」が窓口となります。

発行 日本聖公会全国青年ネットワーク事務局

名古屋市昭和区宮東町 260

tel 052-781-0165 fax 052-781-4334

e-mail youth.po@nsk.org

www.nskk.org/province/youth/